

－ 英 語 －

英文内容理解の素早さが求められた

中学校で学習する英語の内容について、基本的な英語の力を中心に、英語のコミュニケーション能力を見ることを主な狙いとされた。具体的には4つの柱で構成されている。問1でのリスニングでは、音声による英語の理解、問2や問3での文構造や語法といった文法を理解している力、問5や問8では会話文において場面内容を理解する力、そしてこれによる適切な単語を用いる力、問6や問7の問題では、資料から情報を読み取り整理してさらに英語で表現する力といったところである。

具体的には、問1のリスニングの(ウ)では放送内容を基に与えられた英語の文章を完成させる問題で、聞く力だけでなく与えられた英文の読解力をも求められた。選択肢の出題形式ではあるが、「2週間の間」といった“for to weeks”は選びにくかったと思われる。問2から問5では、英単語や文法知識の問題が並んだ。ただし問2では例年単語を記述する問題であったが、単語を選択する問題へと改題された。問4・問5では会話文の内容やその流れから与えられた選択肢や条件から正確な英文を作る力が試された。問6から問8においては、資料を読んで答える問題で、これは例年通りの出題となった。問7では、割引後の価格の計算や予定の調整など、私たちのそのままの生活を想定した場面が設定され、いわば英語力を根幹とした英会話力が求められたと言える。

神奈川県だけでなく多くの都道府県の問題において、英文を読むようにしたい。

－ 数 学 －

問題難度差から解答順序が高得点の差に発展

中学校で学習する数学の内容について、基本力を中心に、計算力と技能、そして事象を数理的に考慮して表現する力、また数学的な見地や考え方等、総合的な力が求められた。その総合的な力は、数と数式による計算技能能力、図形についての基本力を活用とした論理的思考力、関数に代表されるグラフの読み取り力、出題内容を正確に把握した上で考え方を求められた活用力、収集した資料を活用する力といった5つの柱となる。

そのような中、大設問毎に解法がすぐに見つけられる問題と時間がかかる問題の2つに大別され、偏差値の高くない学校を志望している生徒は、手を付ける問題の取捨選択力も求められたと言える。

具体的には、問3の(イ)では表を見ながら資料の説明を読み、下部の適切なヒストグラムを選ぶ問題では、正解を導くのにかなりの時間を費やしてしまうこととなった。また(ウ)や(エ)では平面図形における角度を求める問題で、的確に補助線が引けるか、その上で相似の図形を見出すことができるか、といった解答まで2段階のステップを踏まなければならない、これらもかなり時間が禍かっている問題と言える。しかし問4のグラフを利用した図形の面積比を問う問題では、解法の過程が例年より導きやすいものだったと言える。問5では解法の仕方によっては時間を短縮できる上に、解答がマーク式であったため、桁数間違いを防ぐことができたのではないだろうか。

このようなことから、実践演習での解法順序を身に付けることがポイントとなった。

－ 国 語 －

出題傾向が変わるも大差なし

中学校で学習する国語の内容について、文学的な文章、論理的な文章、韻文、そして古文を素材とし、基本的な国語の力を試されている。国語においては、文章全体の流れを理解しながら文脈の中における語句の意味を捉えられるかがベースとなっている。論説文では文章中に出てくる表現の仕方を正確に捉える力、小説文では登場人物の描写や言動の意味などを考え内容を理解する力、資料問題では目的に応じて必要な情報を読み取り事実や事柄を適切に表現する力、がそれぞれ求められた。基本から応用に至るまでの総合的な力が求められたと言ってよいと思われる。

さて、今年は例年と違い出題順序や出題形式に変更があった。まず古文が問4と後半になったこと、抜き出しや漢字の読みの問題における記述が選択肢問題になったことが挙げられる。問1の出題内容は変わらず例年通りであった。問2の小説文は閉店をするパン屋を舞台とした文章で読みやすく、これに関わった登場人物の心情を場面毎に的確に捉えることができれば簡単な問題と思われる。問3の論説文では言語についてのもので、一般論と筆者の主張をやはり的確に読み分ける力が求められた。説話内容であった問4の古文の章量はやや多いようにも思えるが、その内容は難しくはなく現代語訳が正確に行うことができれば全問正答できる。誰の言動かを常に注意して読み進めるかがポイントとなった。問5は例年通りの話し合いの場面が設定された内容の読み取り問題である。このようなことから、普段から問題をしっかり解くことが求められたと言える。

－ 理 科 －

正確でより高い知識力が求められる

中学校で学習する第一分野、第二分野の難度、問題量に偏りがないように出題されている。具体的には、科学的な知識や概念の理解とそれらを活用する力、及び科学的な見方や考え方を見られた。また観察実験に関しては、目的を持って必要な実験を設定する力、観察・実験から得た結果を分析してこれを解釈する力、そして導き出した事を表現する力が試された。

問題の構成は例年通りで、生物分野からは生物の個体数の変化、化学分野からは化学反応式の作り方、物理分野からは力学的エネルギー、地学分野からは乾湿計と湿度の関係、そして地層の成り方といったものであった。問1の(ウ)や問3の(イ)や(ウ)では実験や観察結果をしっかりと読み取らなければならない問題があり、問4までの問題で時間を取られてしまった受験生も多いのではと思われる。問5では凸レンズを通る光の進み方の問題で、光が屈折した場合どのように変化をして進むのかを正確に知っておく必要があった。一つ目の実験を基に、その後の実験結果について考察させる問題や作図によって結果の確かめができる問題など、分析力と高い考察応用力が求められたと言える。問7は“胃腸薬”を実験に用いた問題で、少し奇をてらう感じがあった。初めて見る実験であっても対照実験の組み方や濃度と反応時間の関係、仮説における検証実験といったことまで、しっかりと考えられる力が求められた。普段の学習から、各单元における正確な知識とそれを活用する応用力を身に付ける必要があると強く感じた。

－ 社 会 －

資料・史料の分析力がカギ

中学校で学習する地理・歴史・公民の三分野の均衡を保ち、基礎から応用までの力が充分測れるように出題された。具体的には、地理分野では世界や日本の地域構成やその特色についての理解、歴史分野では近世までの日本とアジアの関係、また近現代の日本と世界についての基本的な知識・技能を、公民分野では現代社会の文化や特色、日本の経済や政治についての基本事項を核とした問題が出題された。さらに社会的な見方、考え方を働かせ、社会における事象の意味や意義、特色や相互の関係等について、思考・判断する力が各問題で求められた。

具体的には、例年通りで大問が7つ。そして見開きで大問1つの構成となっている。構成も地理・歴史・公民と各分野2問ずつ、最後の問7は3分野融合問題となっている。

地理分野は基本的な知識を問う問題が多かったが、略地図や地形図、表やグラフと合わせて正しく情報を読み取ることが求められた。これにけっこう時間を費やしてしまう受験生も多かったと思われる。歴史分野は日清戦争の風刺画を使つての問題は目新しい物となった。しかし選択肢や史料からキーワードを見つけるというスタンスは変わらない。公民分野では少々時事的な要素も含まれ、憲法改正の詳細な流れを問う問題が並んだ。このようなことから正確な知識を持つ学習が求められる事は言うまでもない。

例年通り、と前述したが、今年は記述形式で解答する問題がなく、資料の読み取り問題が多かった。このようなことから教科書だけではなく資料集の活用も求められる。